
音読の習慣と黙読

— 古代ギリシャ・ローマを中心とした文化的背景としての黙読の研究

安田賢人

— 要旨

M・マクルーハンらメディア論研究者は、活版印刷の導入以前と以後では読書の方法が違っていると主張する。曰く、導入以前の読書とは、音読の事を指しており、黙読とは導入以後認められる読書の方法であった。黙読は一般的には認められていなかったと考えるのだ。

一方本論文では、黙読の存在は一般的にも認められていたものであったと主張する。その為にまず、メディア論の文脈で音読・黙読の扱いを説明し、次に西欧における記述方法の歴史を辿った。

続いて、同様の文脈を非西洋文化へ適用する事で生じる諸国のテキストと、メディア論の前提の不一致を示した。その後改めて西洋文化の実際とメディア論の前提が一致しているかを検証する。西洋文化の源流に当たる古代ギリシャ・ローマ文化における読書の描写と背景を確認して、テキストから前提とされた黙読の存在を浮き彫りにするのだ。

最後に、黙読が実際はどのように認識されていたかを考察して本論の主張を終える。

黙読は活版印刷によって生じる行為か

メディア論の著作には、読書の方法としての黙読は普遍的に存在したものではないと主張するものがある⁽¹⁾。要約すると次のようになるだろう。活版印刷機による書物の大量生産と、その副次的効果としての学習用の書物の増産、及びそれらを元にした教育機関の充実などが行われて初めて黙読は可能になったのである、と。

そうした主張を裏付ける為に挙げられる根拠は主に二通り存在している。一つはそれを書物の形式に求めるという方法であり、実在した媒体そのものの物的変化の歴史を示すものである。もう一つは、書物の内容（記述）に求める方法であり、個別の時代・地域のテキストの内容から「読書」を行っている場面の記述から読みとる方法である。メディア論ではこれら二つの方法を相互に参照することで、社会におけるメディアの役割を主張する。つまり個別の時代のテキストから「読書」の記述を見出し、その読書の方法と当時のメディアの形態を関連づけて考えるのだ。

マーシャル・マクルーハンの主張では、黙読は活版印刷の出現によって可能になったとされる。つまりそれまでは、読書とは音読そのものだった、というのだ。その証拠として挙げられるテキストは、——多くは現代の研究者の著作から孫引き形になるが——さまざまな時代・地域の文献の引用からなっている。『ゲーテンベルクの銀河系』では、アリストテレス、アウグスティヌスといった著名な人物の引用が確認できる。例えば、次のような記述がマクルーハンの読書行為に対する視点を教えてくれるだろう。

【写本文化は会話的であった。それは、〈公演による新作発表〉によって同坐する作者と読者とが身体的に結びつけられていた、という一事からも明らかだ】

古代および中世時代をとおして「読み」は音読を、ときには誦詠すら意味していた（中略）たとえばアリストテレスは『詩学』（二六）のなかでつぎのように指摘している。「悲劇は叙事詩と同様に俳優の所作や演技のたすけをかりずとも効果を発揮しうる。なぜならば台本をただ朗読するだけで、劇の内容がわかるからだ。」ローマでは新著の発表に際して公衆の前で朗読するのが、今日の本の出版に匹敵する形式であった。このローマの新作発表の形式も、われわれの主題である朗読としての読書という観点にサイドライトを当てるものだろう。⁽²⁾

古代においては「読み」は音読を意味していた。という一文があるように、マクルーハンは、古代ギリシャ・ローマにおいて、読書は声を出して読むものであったと主張しているのである。そして、それが黙読へと変わるには活版印刷の登場が必要であると考えているのだ。しかし、本当にそうであったのだろうか？ ゲーテンベルクが活版印刷を世に送り出し、書籍の大量生産が可能になるまで、読書の方法というのは音読であったのだろうか？ 本論文では、それは否であると主張する。マクルーハンや同じメディア論研究者のウォルター・J・オングらの扱うテキストは、彼らの属する西洋のテキストに偏っている。尚且つ西洋のテキストの中にも彼らの主張と矛盾するものが存在しているのだ。

確かにマクルーハンの言うように、活版印刷登場以前には、読書は現在と違って幅広い行動を指したものであったと考えられる。どこでも書物にアクセス出来る状況で、視覚に偏重し声を切り離す黙読だけが読書ではなかったのだ。聴覚に訴えかける事を前提とした記述の方法、特に弁論の場を基準とした音読の方法・技術の発展や、最終的には書物を用いず、暗記を前提とした読書の方法が、視覚以外の情報を遮断した黙読よりも注目されていたという事は事実であろう。しかし、音読の文化が発展する裏には、黙読が存在した形跡が見て取れる。黙読と音読は表裏一体であり、存在していたし、当時でも認められていた読書行為であったのだ。少なくとも、黙って文字を読む人を見ても驚かれるようなものではなかった。こうした「音読の文化的背景としての黙読」を見つけ、「黙読の文化的背景としての音読」というメディア論における定説がどこまで検証できて、その裏にはどのような文化的背景が存在するのか浮き彫りにすること、それこそが本論の目指すところである。

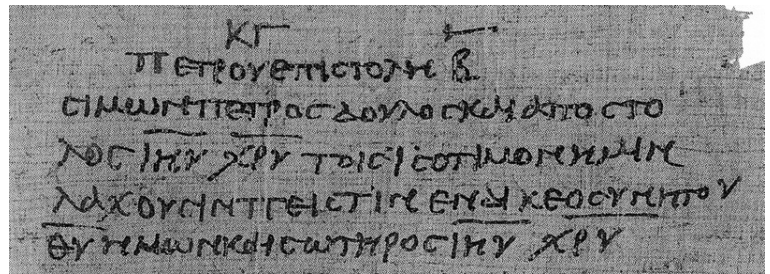
西洋における記述方法の歴史

こうした問題を扱うためには、具体的な文献の引用を行う前に、これらの引用の対象となるテキストの記述方法の歴史について簡単に説明しておく必要がある⁽³⁾。

古代ギリシアにおいて、使用される文字は大文字であり小文字はなく、句読点もなく、単語と単語の間を空けて書く分がち書きも行われていなかった。それは連続記法と呼ばれる語間に単語間の空白の無い記述法であった（図版1）（図版2）。

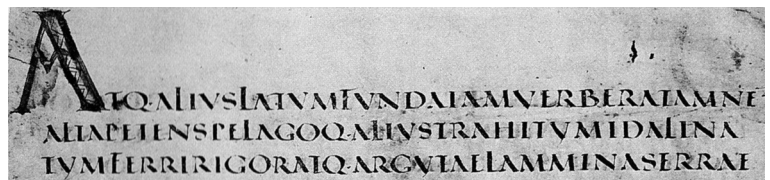
その後しばらくして書体の改良が部分的に行われ、小文字の出現や分がち書きの導入が一部で行われた。しかし、基本的には、書写材料であるパピルス・羊皮紙が貴重であった為に、判読性よりも経済性を重視した書体が優先的に制作された。貴重な媒体に多くの文字を収容する書体が必要とされたのだ。その為、語間を狭くし文字を詰めて書く書体が求められ、アンシャル体、カロリング体が作られる。さらに後の時代には、判読性よりも文字そのものの持つ装飾性を強めたゴシック体が考案され、写本の書体として各地の修道院や都市で広く用いられることとなった⁽⁴⁾（図版3）。

図版 1



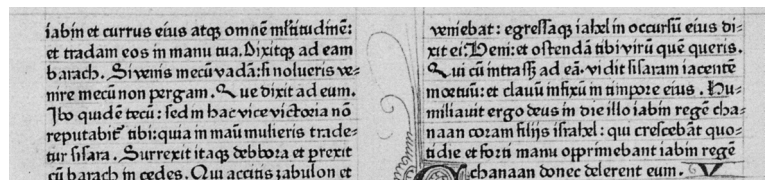
『新約聖書』「聖ペトロの手紙」（ファクシミリ版）3世紀 ギリシア語
ヴァチカン教皇庁図書館蔵

図版 2



ウェルギリウス『農耕詩』4世紀以前 ラテン語 ヴァチカン教皇庁図書館蔵

図版 3



『聖書』通称「四十八行聖書」1462年 ラテン語 ゴシック体
ヨハン・フスト&ペーター・シェーファー印刷 印刷博物館蔵

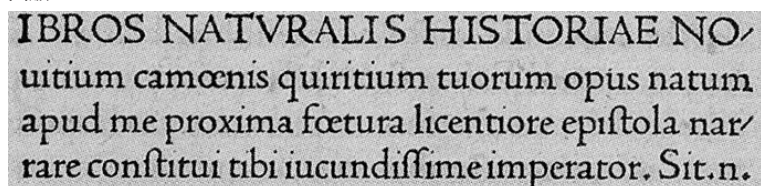
このように書かれた文章は、じつに読み辛いものであった。その為、文章を読むには実際に声に出して自身で単語を区切り、判別していたのではないかという仮説⁽⁵⁾が出されている。

紙及び活版印刷が導入されると、書物の量産が可能となった。その為、書体の改革が始まり、判読性の高いヒューマニスト体（別名ヴェネツィアン・ローマン体）やイタリック体が活字体の主流となる。またイタリック体は他の自体より文字を通常より多く紙面に書き込むことが可能でかつ判読性が高く、優れた小型本の制作が可能となった（図版4）（図版5）。

メディア論者は、こうした読みやすい書物の誕生が、黙読を誘発したとしている。確かに、活字文化のもとで活躍したジェフリー・チョーサーは『名声の館』のなかで、黙読のことを「石のように黙りこくって 本とにらめっこ」⁽⁶⁾と記述している。

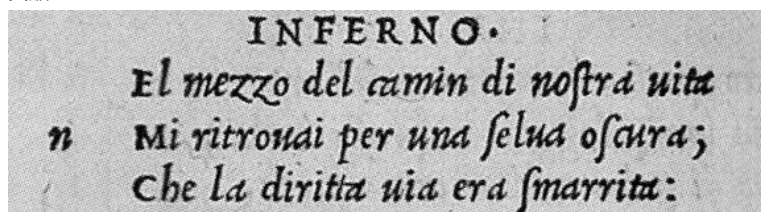
マクルーハンやオングといったメディア論者は、その時代・地域に行われていた文章の記述方法に注目する。判読性が高いか、低いかを手がかりとして、黙読を前提としていたか文章か、音読を前提としていた文章かを判断するのである。確かに活版印刷の出現によって、文字は格段に読みやすくなったといえる。グーテンベルクの四十二行聖書はまだ写本のスタイルを強く意識したゴシック体の書体で活字が鋳造されているが、ヒューマニスト体・イタリック体の印刷になると判読性を重視した読みやすい書体で鋳造された。マクルーハンやオングは、こうした判読性の高い活字への移行が黙読を可能にしたとしている。

図版 4



プリニウス『博物誌』1472年 ラテン語
ヒューマニスト体（ヴェネツィアン・ローマン体）
ニコラ・ジェンソン印刷 印刷博物館蔵

図版 5



ダンテ・アリギエーリ『神曲』1502年 トスカーナ語 イタリック体
アルドゥス・マヌティウス印刷 印刷博物館蔵

活版印刷導入の時期とアジア諸国の読書方法の不一致

しかし、活版印刷の出現の時期と黙読の記述が現れる時期は、必ずしも一致するわけではない。後述するが、ギリシャ・ローマの時代には既に黙読が存在していた。

また、マクルーハンやオングは『グーテンベルクの銀河系』『声の文化と文字の文化』にて、メディアの形態が受容の方法に与える影響を時代・地域を問わず対象として参照にする事で普遍的なメディアの影響力を導き出そうとしていた。しかし、こうした対象を西洋に絞らない姿勢は、却ってマクルーハンの説に当て嵌まらない記述を増やすこととなる。

例えば、活版印刷の導入及び普及が西欧世界から遅れ、西洋の制度や記述の導入が始まる前のアジアの文献からも、黙読の存在は確認できている。中世イスラーム学者イブン・ハルドゥーン (1332-1406) の『歴史序説』にはこのような記述が見られる。非アラブ人への幼少期からアラビア語教育について述べた記述である。

なぜ大半の非アラブ人学者が研究にさいしても、教室で授業を受けるにさいしても、直接書物から注釈を写さず、声を上げてそれを読んでいるかわかったであろう。この方法によって、彼らは「言葉と概念とのあいだにある」被幕にあまり煩わされることなく、概念をたやすくつかむことができる。言葉や文字の表現に関する完全な習性を持っている人であれば、声を上げて読むことはない。⁽⁷⁾

上記のように、黙読が出来ず、音読してから書物の内容を理解する非アラブ人学者のいたことが述べられている。また、江戸時代日本の儒学者江村北海 (1713-1788) は『授業編』で読書の要訣について述べているが、その中で音読と黙読について触れている。すなわち「サルニテモ書ヲヨムニ聲ヲアゲテヨムガヨキカヤ 黙シテヨムガヨロシキカヤト問フ人アリ コレハ各得失アリテ一方ニテハイヒ難シ」としつつ、次のように述べている。

「聲ヲ揚ゲテヨムナラバ 字音ヲ正シ 句讀ヲ分カチヨムベシ 字音ノ疑ハシキハ打チステオカズ ソノママ字書ニテ吟味スベシ 吾伊 ノナキヤウ 又同ジ字ヲ クトグト再三ヨムナド スベテ聞キヨカラヌ音聲 マタビロウナルヨミナドヲ ズイブン心ヲツケ タシナミテ讀ムベシ」⁽⁸⁾

江村は、音読を行う際の姿勢を上記のように示している。江村曰く、音読とは単語の発音を明確に行い、文章の分かれ目をはっきりと意識し、疑わしき部分はそのままにせず吟味して不明瞭な部分が己の中から無くなっていくように読むものである。続けて、黙読の場合は、音読による不明瞭な部分が無くなった後の詳しい研究に向くと述べている。

「既二十遍モヨミタル書ヲ　クリ返シ讀意義ヲクハシク求ムルニハ　黙シテ書ヲミ
ルガヨシ」⁽⁹⁾

イブン・ハルドゥーンにしても、江村北海にしても活版印刷の導入^{(10) (11) (12)}以前の人物であるが、しかし上記の引用を見ると、彼らは音読や黙読に対して明確に区別を持ちその効用について語っていることが分かるだろう⁽¹³⁾。活版印刷の導入は書物の大量生産による読者の絶対数を底上げし、かつ判読性の高い書物を追求していく傾向性を生み出す為に、黙読をする人物が増えてきたということは事実であろう。一方でこうした非西洋の事例を見ると、活版印刷があろうとなかろうと人々は読書を行う中で、黙読も音読も状況に応じて共に行われていたことが分かるだろう。

文字への不信感

では、どうして現在と同じように黙読を行っていたと判断することが出来ないのか、という問題を示さなければならないだろう。それは、マクルーハンやオングといったメディア論の著名人が西洋文化史——古代ギリシャ・ローマから始まり中世ヨーロッパ、近代・現代のヨーロッパ諸国及び深い関係にある諸国の文化史——の研究を基礎としているからと考えられる。しかし注意しなければならないのは、この西洋文化史の文脈の中でも、音読と黙読は揺れ動いていたという点だ。そういった揺れ動きを改めて知ることによって、西洋文化史の中での読書の傾向性を知る事が出来るだろう。

最初に着目すべき対象は、プラトンである。古代ギリシャの哲学者プラトンは、弟子のアリストテレスを通じて現代まで西洋文化に深く根付いた偉大な哲学者であるが、プラトンの『パイドロス』を見ると古代ギリシャ人の文字への不信感を知る事が出来るだろう。『パイドロス』にてソクラテスは文字について激しい批判を行った事が知られている。それは次のような場面だ。

なぜなら人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がおざなりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植え付けられることだろうから。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ⁽¹⁴⁾

これは、プラトンの師匠ソクラテスが、パイドロスの問いに答える場面であり、その内容は文字にものを書き付ける事の是非についてである。この問いにソクラテスはエジプトの古い話に仮託して、人間は文字によって記憶の訓練を怠るようになると痛烈に批判した。

身につけなければいけない事柄は自身の記憶に刻み込まなければならない、文字はあくまでも想起の秘訣である、とプラトンはソクラテスに託して記しているのである。つまり、書き付けられたものは、想起する為のものであって、本来は文字が不要になるまで身体に刻みつけるべきものである、と考えたのであった。

『詩学』は黙読を否定したか

前述の通りマクルーハンが、古代・中世の音読の実例を語って見せた事は紹介した。その実例の一つがアリストテレスの『詩学』であった。具体的に該当箇所を見てみよう。二十六章の叙事詩と悲劇を比較してそれぞれの特徴を述べている場面である。この記述からマクルーハンの言うように本当に読書と言えは音読が普通であった、もしくは黙読は普通ではなかったと知り得るだろうか？

第二十六章 叙事詩と悲劇の比較

こうして、叙事詩は、所作をまったく必要としない、教養のある観客を相手とするものであり、これにたいして悲劇は低俗な観客を相手とするものである、といわれる。したがって悲劇は、もし低俗なものであるなら、明らかに叙事詩よりも劣っていることになる。 (中略) さらに悲劇は、たとえ身ぶり動作を伴わなくても、それ自身の効果を生み出すことができる。この点は叙事詩と同じである。なぜなら、ある悲劇作品がどのような性質のものであるかは、それを読みさえすれば明らかになるからである。^{(15) (16)}

つまり、悲劇は読み上げられる声も含めて作品として考えられ、読み上げて美しい言葉を意識して作られたと言っていいだろう。一方で、この文章が音読を意識して作られた事は確かと考えられるが、黙読が行われなかったという説明になっているとは言えないだろう。

古代ローマにおける著作の発表

前述したマクルーハンの引用で、音読が行われていた証拠として、引用された著作の一つに小プリニウスの書簡集と思われる記述があった。このプリニウスはトラヤヌス帝時代のローマの人物で、『博物誌』の著者大プリニウスの甥であり、かつ養子である。彼は膨大な量の書簡を残し、書簡集として今に至るまで読まれてきた。彼の書簡の中に、マクルーハンの主張した著作の朗読による発表会の記述が残されている。

第一巻 十一 朗読会 ソシウス宛

今年は詩人がたくさん輩出しました。

四月中誰かが朗読しない日は、ほとんど一日もなかったのです。学芸が栄え、人々が自分の才能を現し、世に示すことは喜ばしいことです、たとえ朗読を聴くために、人は不承不承集まってくるとしても。

著作の発信が音読によって行われていたという発想はこの記述から生まれたものであると考えられる。確かに、著作の流通を書店のみで行う前提ならば、こうした朗読の文化などは発達しないであろう。また別の書簡では朗読されていた書物が（詩ではなく）学術書であった朗読会の記述もあり⁽¹⁷⁾、文学作品であろうとも、学術書であろうとも、朗読会が開かれていた事がわかる。つまり、音声を媒介にした書物の享受の文化が古代ローマでは定着していたという事が、小ブリニウスの書簡集からは見て取れるのである。

古代において読書と言えば音読であったとされる根拠

音読と黙読の歴史を振り返る中で、多くの場合引用される重要人物がいる。4-5 世紀の古代ローマ・北アフリカのヒッポ司教アウレリウス・アウグスティヌスである。

彼は著作『告白』にて、己の生涯を振り返り記述している。読書の歴史を論ずる人々に引用される⁽¹⁸⁾ 根拠が、『告白』の第六巻第三章である。アウグスティヌスは弁論術の講師としてミラノに派遣されていたが、その先で後の師となるアンブロシウスと出会い、彼の説教に惹かれるという場面だ。しかしその後、アンブロシウスは多忙で、自由に語り合う事が出来ない。そうした用事に忙殺されるアンブロシウスを、描写した部分だ。

かれが書を読んでいたとき、その眼は紙面の上を馳せ、心は意味を探っていたが、声も立てず、舌も動かさなかった。しばしば、わたしたちがかれのもとにいたとき——だれがはいっても差し支えなく、来客を取り次ぐ習わしでなかったのも——かれはいつもそのように黙読していて、そうしていないのを見たことは一度もなかった。

注目に値する記述は、アンブロシウスが黙読を行っていた事、そしてそうしたアンブロシウスの黙読を見て、アウグスティヌスが驚いている点である。そしてアンブロシウスの黙読に違和感を持ったアウグスティヌスは、その声も立てず、舌も動かさない読書について次のように考察する。

そしてわたしたちは、長い間すわっていた——（中略）——のち、そこから出て、こう推測するのであった。すなわち、かれは、他人の仕事のさわがしさに煩わされない自然の精神の保護のために得たその短い時間中に、また別の仕事に呼び戻されたくないのであろう。また、おそらく、かれがその書を読んでいる著作がなにか不明瞭なことを述べていると、熱心に注意深くそばで聞いているもののために、それを説明し、

あるいはもっとむづかしい問題について議論することも必要となつて、このような仕事に時間をとられ、自分が思うほど多くの書をひもとけなくなることを用心しているのだろうと⁽¹⁹⁾

読書と言えば、音読を指していたという主張の多くは、このアウグスティヌスの記述を論拠として展開されている。例えば、アルベルト・マンゲルの記述がそれである。

しかしアウグスティヌスにとっては、こうした読書法、黙ってページを追うといった方式がきわめて奇妙に思われたようで、『告白』に彼はそのことを書き残している。つまり、こうした読書法、黙ってページを追うといった方法は、当時、一般的なものではなかった、音読するのが普通であったというわけである。⁽²⁰⁾

しかし、本論文では、全ての人が音読を行っていた、もしくは黙読は特殊な技能であつて、一般には認められたものではなかったとは考えていない。アウグスティヌスが感じた違和感の根底に黙読の不可能性を見るのではなく、別の前提、弁論術の伝統という視点があつたのではないかと考えている。その根拠とするのは、アウグスティヌスは教師として招かれる程、弁論術の研究に熱心であつたという点である。当初、アウグスティヌスがアンブロシウスの説教を聞いた理由も信仰から来るものでは無く、弁論術の力量を確認する為であつた⁽²¹⁾。当時のローマでは弁論術が学問を学ぶ上での基礎教養であつたのだ。こうした基礎教養の弁論術に、音読を好む指向が存在しているのである。

弁論術の地位

では、弁論術とはどのような学問であつたのだろうか。桑木野幸司氏が『記憶術全史 ムネモシュネの饗宴』にて、簡単に説明している個所を引用させてもらおう。

古代ローマ時代に基礎が確立された西欧の伝統的な弁論術は、次の5つの分野で構成されていた(中略)。すなわち、①「発想(inventio)」(弁論の主題にふさわしいトピックを、あらかじめストックしてある情報群の中から探し出すこと)、②「配置(dispositio)」(①で得られた内容を、適切な順序で配置・展開させること)、③「修辭(elocutio)」(狭義のレトリック、すなわち主題を効果的に提示する言語表現をあれこれと工夫すること)、④「記憶(memoria)」(弁論内容を記憶すること)、⑤「発表(pronuntiatio/actio)」(弁論の実践の際に発声や身振りを工夫すること)。これらのうち、今日いわゆる修辭学(レトリック)として理解されているのは、③の「修辭」の部分である。けれども、弁論術は本来五つの分野すべてがそろった総合的な学問としてこそ、古代世界で高い地位を有していたのだ。この点を忘れてはならないであろう。⁽²²⁾

と述べている。現在では弁論術を指す言葉は主に、③の「修辞」の部分を指している。しかし、当時の弁論術は、使用する言葉・知識の選定や配置、修辞、記憶の訓練、口演の技術までを含めた総合学習術であった。続いて、桑木野氏はどのような人物が学んでいたかも示した。

しかも、特別な才能にめぐまれた文章の達人が使いこなす技巧ではなく、むしろ入門教程の中で誰もが学ぶ基礎事項だったという点が重要だ。⁽²³⁾

弁論術はローマにおける教育の基礎として学ばれていたのである。アウグスティヌスも、アンブロシウスも弁論術を学んでいた。では、どのようなテキストが使われてきたのであろうか。アンブロシウスについては、弁論術を学んだという記述⁽²⁴⁾が見当たるものの、教材に何を使ったのか明言した記述は見つけれなかった。一方でアウグスティヌスについては、明確に弁論術に学んだ描写が『告白』⁽²⁵⁾にてされている。対象となったのはマルクス・トゥッリウス・キケロである。

キケロの著作は後世に多くの弁論家に学ばれた。前述の桑木野氏の引用にあるように、現在弁論術とされる学問は弁論術の一部である修辞の部分のみである。しかし、キケロは問題の選定や配置、展開から修辞、口演の方法まで含めて一つの繋がりとして考えているが、その中で特に実際に自分の言葉として発する「演説」の重要性を強調している。

そして〈発想〉〈配置〉〈修辞〉〈記憶〉〈発表（口演）〉の五つの項目の中で、特に〈発想（口演）〉を重要視している。次のような記述が良い例であろう。

しかし、それもこれも、すべては口演法次第なのである。口演こそ、とわたしは言いたい、唯一弁論に君臨するものなのである。この口演（の力量）がなければ、たとえ最も優れた弁論家といえども弁論家とは見なされえないのである、この口演（の力量）をそなえていれば、たとえ並の弁論家といえども最も優れた弁論家をさえ凌駕できるのである。デーモステネスは、弁論で第一の要諦は何かと訪ねられて、こう答えたという、第一は口演であり、第二も口演であり、第三も口演である、と。⁽²⁶⁾

彼のまとめる学問体系においては、最も重要視されるのは、実際に声に出して伝えることだったのだ。

アウグスティヌスは、学識も高く基礎的な弁論術の教養を身につけたアンブロシウスが口演の訓練に重点を置かず、一心不乱に書物をより多く読み解かんとする姿勢に驚いた、とそうように考える方が妥当なのではないだろうか。少なくとも、アウグスティヌスは黙読する師を見て驚きはするものの、すぐに理由を考察し、納得している。

もっともかれの声はしわがれがちであったので、声を大事にすることもまた、そし

てその方が黙読のほんとうの理由であったかもしれない。しかしどういう心づもりで黙読していたにせよ、かれがそうしていた心づもりは正しかったのである。⁽²⁷⁾

アウグスティヌスの驚愕は当時の基礎教養をかなぐり捨ててでも、書物を求める師の姿勢に対してであり、決して黙読を理解の埒外に置いたものではなかった。黙読とは声が枯れるのを防ぐために行うような、一般的に認められた読書であったのだ。

では、これからギリシャ・ローマにおける黙読が行われてきた例を挙げて、その中で読書はどのように考えられていたのか検証しようと思う。

聞こえない声Ⅰ——イリアス

古代ギリシャにおいて黙読が行われていたかを検証してみたいと思う。

現存する作品で、古代ギリシャにおいて最も古いと考えられている作品はホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』である⁽²⁸⁾。この作品にも黙読と疑われる描写が存在する。

「ねえ、プロイトス、あなたが殺されたくないのなら、ベレロポンテスを殺しておしまいなさい。あの男は嫌がる私に迫って、情を交わそうと思っているのですよ」

こういうと王は何たることを聞くものと激怒したが、さすがに気が咎めて殺す事は避け、彼をリュキエに遣わした。その際二つ折りの書板に彼の命を奪う手立ての委細を書き記した恐るべき符牒を手渡し、それを義父に示せと命じ、彼を亡き者にしようとした。(中略) ようやく王は客にいろいろと訊ね、娘婿のプロイトスの許からという符牒を記した書状を見たいといった。さて、娘婿の送ってきた、姦計を秘めた書状を受け取ると、最初に凶暴なキマイラ退治を命じた。⁽²⁹⁾

「イリアス」内にて、ギリシャの戦士ディオメデスとトロイアの戦士グラウコスが互いの素性を語る場面より、グラウコスが自らの先祖ベレロポンテスの逸話を語る場面の一節である。プロイトス王の妻アンティアが王に嘘を吹き込み、ベレロポンテスを殺させようとする場面にて、王はベレロポンテスを死地に送るべく計画を練り、義父への書状を書きベレロポンテスに届けさせた。義父はベレロポンテスの前で書状を読み、意図を理解してベレロポンテスを凶暴なキマイラ退治に向かわせる。

この描写では二つの部分に注目することが出来る。一つは王が書状を読むこの場面で音読が行われていた場合、ベレロポンテスに計画が伝わってしまうという危険性である。音読を前提としていたら、そもそもプロイトス王は書状をベレロポンテスに持たせないだろう。つまり書状に関しては、その場にいるだろうベレロポンテスに伝わらないで読まれるもの、という認識があったということだ。しかし他のテキストと違い、『イリアス』ではベレロポンテスの伝説が語られる形式である為に、ベレロポンテスと義父の位置関係や時間

の進み方に曖昧な部分が残ってしまう。残念ながら『イリアス』の描写では黙読が認められていた可能性を示唆するに留まるものである。

聞こえない声Ⅱ——ヒッポリュトス

古典期ギリシャの詩人エウリーピデースも悲劇『ヒッポリュトス』の中で、黙読と思われる記述を残している。しかし、次の記述もアウグスティヌスのように直接黙読に言及する訳では無い。この悲劇には、読書（読字）行為の際に同行している人物に知られることなく読む描写が存在しており、これを黙読の例と考える事が出来るだろう。

大まかな筋は次のようなものだ。ヒッポリュトスはアルテミスと純潔を崇拝し、アフロディーテを蔑視する。怒ったアフロディーテは義母のパイドラーに義息への恋心を吹き込み、意を汲んだパイドラーの従者は、義息に想いを伝える。ヒッポリュトスは強く、口汚く義母を拒絶する。絶望したパイドラーは王に事の顛末が伝わる事を恐れ、嘘の書き置きを残して自殺する。遺書には義息に襲われそうになった故、貞操を守るため自殺すると書かれていた。テーセウスは父ポセイドンに願い、ヒッポリュトスは瀕死となる。テーセウスの元にアルテミスが現れ、真実を告げる。ヒッポリュトスは死の直前、テーセウスとは和解するも、その直後に息絶える。該当の記述はパイドラーの死をテーセウスが知る場面だ。

コロス ほんとにおいたわしい殿様、このたびのお邸の御不幸はなんと申してよいやら……（中略）

テーセウス （パイドラーの死骸の側に立って） おおこれは。

妃の手からさがっている、この書板はなんであろう。

なにかまた吉からぬことでも記してあるのであろうか。

或いはまた、おれの後添え、子供らの看取りについて、頼みごとでも残していったのか、不憫なやつめ。（中略）

なんと書いてあるかよむとしようか。

コロス ああ、ああ、

神様はひきつづき、またこの新たな禍いを下したもうか。（中略）

テーセウス （書板をよみ終え、死骸の傍をはなれてきて）

おお、これはまた、なんという悪いことがつづいて起こることであろう。

まことに言語道断なこと。なんとおれは不運な人間であらうか。

コロスの頭 何事でございます。御無礼でなくば、お聞かせくださいませぬか。

テーセウス 恐ろしい、恐ろしいことがこの手紙には書いてある、ああ、重くのしかかってくる不運の数々を、（中略）

コロスの頭 ああ、そのお言葉は、凶事の前触れとしか思われませぬ。

テーセウス いや、このおれも、思うだけにけがらわしい、この呪わしい不祥事を、
いつまでも黙っているつもりはない。
おお、わが祖国も聞き給え。
ヒッポリトスめが、きびしいゼウスの御目も憚らず、おれの閨を無礼に
も犯そうといたしのじゃ。(後略)⁽³⁰⁾

パイドラーが残した書板をテーセウスはコロスの頭が同席する中で読む。そしてテーセウスは嘆きだす。心配したコロスの頭はテーセウスに何を書いてあったのか問い詰める。書板を読む場面で、テーセウスが音読をしていたならば、コロスの頭に聞こえていたはずで、「何事でございます。御無礼でなくば、お聞かせくださいませぬか」と聞く必要など無く、音読では辻褃が合わないのである。これは黙読であると考えられる描写である。

聞こえない声Ⅲ——騎士

同時期のギリシアの劇作にも、黙読の記述と言われる作品がある。アリストテレスの『騎士』である。大まかな筋は次のようなものだ。

デーモス家の新入下男、パプラゴニア人は主人に取り入るのがうまく狡猾である。古参の下男デモステネス、ニキアスから仕事の手柄のみを奪い取って、自分の手柄にしてしまう。主人はパプラゴニア人を信じ込んでしまい、彼の述べる託宣らしき言葉を盲信してしまう。デモステネス、ニキアスは不満を感じ、パプラゴニア人に一泡吹かせようと一計を案じる。パプラゴニア人が大事に隠し持っている「託宣なるもの」を、眠っている間に盗み、勝手に予言を見てしまい、パプラゴニア人の弱点を握ろうとする場面だ（予言には、さらに狡猾な豚肉屋の存在と、パプラゴニア人が追い払われる事が書かれている）。

デモステネス あいつのねている間にな、急いで奴の託宣を盗んでここへもってくるんだ。

ニキアス そりゃやってもいいがな。おまえの尊^{みこと}はいいが、お陰でひでえ祟りをうけそうで怖えなあ。[しぶしぶ中へ入ってゆく]

デモステネス [酒壺をひきよせ] じゃ酒はこっちへいただいと、頭に湿り気くれて気の利いたことをいえるようにな。

ニキアス [盗んだ託宣なるものをもって現れる] あいつの屁の音と鼾ときたら全くひでえもんだ。おかげで奴の後生大事にしまっていた託宣を気づかれずに盗んでこれた。

デモステネス でかしたぞ、朋輩。お前はさっさと酌をしてくれ。さあ、おれが読んでやるからそれをかしな、さて中になんとあるかな。おおこれは予言だ、さあ早く盃だ、盃だ。

ニキアス さあ〔盃を渡し〕そこでお告げに何とある。
 デモステネス もう一杯注げよ。
 ニキアス お告げに「もう一杯注げよ」と書いてあるのか。
 デモステネス ふうむ、こりゃバキス⁽³¹⁾のお告げだぞ。
 ニキアス それで。
 デモステネス さあ早く盃だ。
 ニキアス バキスはよっぽど盃が好きと見えるな。
 デモステネス あのいけ好かねえパプラゴニア人め、これであいつが前からひた隠し
に隠していやがった理由がのみこめたぞ。手前の身についてのお告げ
 を怖がってやがったんだな。
 ニキアス ていうのはどういうわけだ。
 デモステネス あいつも永いこたあないと、ここに書いてあるんだ。⁽³²⁾

盃を持ったデモステネスがニキアスに代わって託宣を読み上げると言う。ニキアスは盃に酒を注いで渡し、何と書いてあるか聞く。すると盃を空にしたデモステネスは「もう一杯注げよ」などと自分の欲望を優先した言葉を返す。その言葉に対し、「お告げにそう書いてあるのか？」と聞き返す場面がある。

デモステネスは読み上げると宣言していたのだから、当然ニキアスは音読を想定していたのだ。その為、ニキアスは託宣を読み上げたと勘違いをしたというわけである。

黙読の証拠と考えられるのは次の描写である。「あのいけ好かねえパプラゴニア人め、これであいつが前からひた隠しに隠していやがった理由がのみこめたぞ。」と次の台詞が入った時にはデモステネスは託宣の内容を読み終え、把握しているのだ。しかし、ニキアスに声は聞こえていないようで、「ていうのはどういうわけだ」と聞いている。つまり、デモステネスは黙読を行っていたのである。

音読に先行して行う黙読——アコンティオスとキュディッペ

古典期のギリシャから更に時代は下り、ヘレニズム期に入ると学問の中心地はアレクサンドリアに移る。そして大規模研究施設としてアレクサンドリア図書館が作られる。この時代にも黙読の存在がうかがえるテキストがある。『アコンティオスとキュディッペ』は前述のアレクサンドリア図書館の学芸員カリマコスの作品である。本作品では黙読の描写と言うよりも、頼まれて音読の最中でも、視覚にて先の文章を把握し、その内容に驚いて読む声を止める場面が描かれているのだ。

大まかな筋は次のようなものだ。アフロディーテーの美貌を受け継いだと評される乙女キュディッペと、学び舎へ向かう度、彼を一目見ようとした男達が、群れを為す程の美少年アコンティオスの恋物語。

ある日キュディッペを見たアコンティオスは恋に落ち、一計を案じた。アルテミスへの誓いの言葉を、マルメロ（林檎）に彫りつけ、キュディッペの侍女の元へ転がすのだ。すると字が読めないであろう侍女がキュディッペに読みあげを頼む事を見越した策であった。そしてキュディッペはまんまと読み上げてしまう。読み上げの最中、内容に気付いたキュディッペは恥じて途中で読み上げを止めるが、その言葉はアルテミスへと届いてしまう。「私はアコンティオスの妻になります」と神に宣誓した為に、アコンティオスとの結婚が決まってしまったのである。アルテミスへの誓いを違えれば、射殺されてしまう。計画がうまくいったものの、アコンティオスは企みを後悔し始める。その後、デルフォイの託宣によって、双方の結婚が肯定され、無事アコンティオスとキュディッペは幸せな結婚生活を送る。

そうした物語の中でキュディッペがマルメロを拾う描写である。

そこであなたは、アルテミス女神の社前に腰を落とす乙女を認めるなり、アプロデイトの苑からキュドニア林檎を摘んできて、その表面に企みの言葉を彫りつけると、侍女の足許にそっと転がしてやったのです。侍女は実の大きさと色鮮やかさに驚いてそれを拾い上げるが、一体どこの娘が、うっかりこれを懷から落としたのか、見当もつきません。そして言うには、

「マルメロや、お前は神様のものなのかえ？ 周りに彫りつけた文字はなんでしょう。いったい何を伝えたいの？ お姫様、どうぞこれを。見たこともないようなマルメロです。なんて大きいんでしょう。燃えるようで、薔薇にも負けない赤さです。それに、香りの素晴らしいこと。遠くからでも鼻をくすぐります。嬢ちゃま、なんて書いてあるのか、読んでくださいな」

少女がこれを受け取り、文字の上に目を走らせながら読み上げようとしたのは、

「アルテミスにかけて、私はアコンティオスの妻になります」

という言葉でした。実意なく、無意識に口にしたとはいえ、これは誓文です。彼女は読み終わらぬうちに、恥ずかしくて色恋の言葉を取り消し、最後のところは打ち切って声に出しませんでした。だって慎みふかい乙女なら、人が語るのを聞くだけでも赤くなるような、結婚のことが書いてあるのですもの。あんまり顔が赤くなりすぎて、頬っぺの下に薔薇の苑があるかと思われたくらい、そしてその紅色は唇と変わらないほどでした。

少女は口に出し、アルテミスはお聞きになった。⁽³³⁾

侍女に渡された林檎に書き付けられた文字を、無自覚に読み上げると、読んでいる最中に先行して目で内容を確認して、内容の恥ずかしさに気付き、声を打ち切る。つまり、音読にも先行して目にて内容を把握する事がこの記述から見て取れる。また朗読した声を自ら聞かなくとも内容が把握できた事が、このエピソードから理解できるだろう。

『アコンティオスとキュディッペ』の問題点

ただし、この資料には問題点がある。記述でなく、記載されている資料の問題である。

この『アコンティオスとキュディッペ』はカッリマコスの著作『縁起物語』の一部であるが、この『縁起物語』は散逸していて、断片しか残っていない。その為、先ほどの引用は5世紀の人物アリストイネトスの『愛の手紙』から訳出されたものである。『愛の手紙』はヘレニズム期の作品を集めて素材とし、書簡の形で語った作品である。散り散りになった断片が『愛の手紙』に対応している為、話の内容は『縁起物語』からの転用である。

しかし、『縁起物語』の本文が断片しか残っていない為、全てが同じとは言い切れないのだ。例えば、『縁起物語』の断片では、引用に該当する部分は次のようなものしか残っていない。

「キュディッペは美しい」と、告げるだけの文字を、
お前たちの小膚に彫りつけさせてくれ。(断片七三)

という断片で、次に残っている断片は、

恥知らずな僕だ、どうして君にこんな恐ろしい思いをさせたのだろう。(断片七四)

という断片であり、アコンティオスが後悔している場面になってしまう。

他にも、このアリストイネトスが何かしら記述を変更した可能性は否定できない。ただし、アリストイネトスの時代には、キュディッペのように目によって内容を確認し、朗読を止める行為が読者によって受け入れられる程に一般的に認知されていたと考える事は出来るのだ。

アレクサンドロス大王は音読を禁ず——「アレクサンドロスの運または徳について」

古代ギリシャにおいて黙読に関する著作は以上であるが、後の古代ローマにおいてプルタルコスは、「アレクサンドロスの運または徳について」にて、アレクサンドロスの逸話を紹介しているが、その中にてアレクサンドロスが黙読をしている事が記述されている。

ある時、彼が母からの内密の手紙を読んでいると、たまたま傍らにヘパイステイオンが坐っており、いささかも憚ることなく一緒に読んでいました。アレクサンドロスは妨げはしませんでした。自分の指輪の印章を彼の唇に押し付け、友愛を信じて沈黙の封印をしました。哲学者らしくであります。そもそも以上のことが哲学者らしく

ないとすれば、これに該当するものが、他に何がありましょうや。⁽³⁴⁾

アレクサンドロスは母オリュンピアスから内密の手紙を受け取り、黙って読んでいたが、同席していたヘパISTIオンは内密の手紙を憚らず音読し始めた為、アレクサンドロスは読む事は許したが、声に出す事は許さず、ヘパISTIオンの口に指輪（を嵌める手）を押し付け、沈黙を要求したという事だ。アレクサンドロスは自然と黙読を行っていた。そしてヘパISTIオンは当初、音読を行っていたものの、アレクサンドロスによって沈黙を要求されたのだ。

この出来事が実在したアレクサンドロスによって行われたかどうかは、証明しようがない。しかし、ヘレニズムも終わり、帝政ローマ初期の段階ではプルタルコスのこういった記述は受け入れられていたと言えるのである。

以上のテキストを鑑みると古代ギリシャにおいては、自覚されていたかは定かでないが、基本的な能力として黙読は行われていたと考えられる。ただし、殆どの資料で読まれた対象は書版や託宣、林檎に掘られた文字など短い文章に限られている。また、『アコンティオスとキュディッペ』の描写を見る限り⁽³⁵⁾、声に出さない文字も内容を把握する事が可能であった為に、ヘパISTIオンも沈黙を要求されれば、音読を止めさせる事が可能であったかもしれない。

しかしながら、依然として声の文化は根強かった。それは、前述の『パイドロス』の文字への不信感が見られる部分や悲劇は読み上げられるものという『詩学』の認識が根底にあると考えられる。

確実な黙読 —— 判断の基準

では、古代ギリシャと同じように、古代ローマでの黙読に関する記述を精査して行こうと思う。

ヘレニズム期から一世紀後のローマにおいては、完全に黙読の記録が残っている。「アルマゲスト」で名を残すクラウディウス・プトレマイオスが記した「判断の基準」という著作である。日本語の全文訳は存在しないが、古代ギリシア・ローマ研究者の柳沼重剛氏が、『西洋古典こぼればなし』にて、その存在を示し、【トイプナー古典叢書】から該当部分を訳出している。

プトレマイオス「判断の基準」より柳沼重剛部分訳である。

あるものを判断し、それが何であるかを知るためには、心の内の言葉（ロゴス）だけで事は足りる。口に出される言葉は、そのためには何の貢献もしない。それどころか、われわれの感覚がはたらく場合とよく似たことだが、むしろ検証を混乱させ、あらぬ方向へ導いてしまう。それゆえ、われわれが探求しているものは、静かに落ち着

いている状態であり、読書の場合でも、もし内容をしっかり理解しようとするなら、口を開いて物を言ったりしないのだ。⁽³⁶⁾

プトレマイオスは理解の際に文字を読みあげ、声にする事は却って理解を妨げると述べておりこれは、間違いなく黙読の記述である。この、「判断の基準」については、古代ギリシャ・ローマの音読と黙読の関係を探る柳沼氏も、確実に黙読であると評価している。このテキストは音読・黙読の関係を考える上で大変重要なテキストである。わざわざ著作にて黙読の効用を説く程には、音読がプトレマイオスの生きる時代に定着していた事、そしてプトレマイオスが提唱すれば可能である程に読書には容易であったことを示す記述である。

また、前述のプルタルコスは、別の著作にて、カエサルが政敵である小カトーと議会で論争する中、手紙を黙読して小カトーを怒らせた⁽³⁷⁾という記述を残しており、少なくとも音読が定着していた時代であっても、手紙の黙読は議会という公の場で行っても誰も驚かない程に認知されていたようである。

黙読が前提となる“読んだふり”——タティオス

帝政ローマのアレクサンドリアにてギリシャ語の小説が発表された。アキレウス・タティオスの『レウキッペとクレイトポン』である。現代に伝わる恋愛小説の中で最古の部類に入るものである。

主人公はフェニキア人の青年クレイトポン。恋に落ちたクレイトポンは、激しい恋の炎に振り回されるようになる。何処に行っても何をしても、レウキッペの事ばかり考えてしまうのである。そういった行動の一幕が次の記述だ。

見る夢すべてがレウキッペだったのです。彼女と話し、一緒に遊び、一緒に食べ、彼女に触れ、昼間よりずっといいことがありました。彼女にキスもしましたし、しかもそのキスは本式でしたから。だから召使いが私を起こしたときには、こんな甘美な夢を壊したといって間の悪さを罵りました。

私は起き上がると、家の中でわざと娘の前を歩き出し、本を手にして身をかがめて読んでいるふりをしました。ドアのところにくるたびに下から彼女をこっそり見上げました。何度も往き来して彼女の姿から恋を注ぎ込み、まったく心を病んで立ち去りました。この炎は三日にわたって燃えつづけました。⁽³⁸⁾

この作品において厳密には黙読と見られる行動は行われていない。黙読を前提にした行動が見受けられる。

本は読まれず、読んだふりを行うのである。しかし、本を読んだふりが通用するならば、

それは次のような認識が前提とされている。それはレウキッペがクレイトポンの事を、本の前で立ち竦む奇妙な人物と考えるのではなく、黙読している人と認識していたからこそ、読んだふりは可能だったのではないか、ということである。つまり黙読は一般的で、特に驚くようなものではなかったという前提が見受けられるのである。

いくつかの共通点

少なくとも、現在まで用いた資料から共通点を見出すのなら、アルカイック期の『イリアス』⁽³⁹⁾、古典期の『ヒッポリュトス』『騎士』を通して、音読か黙読かははっきりと判断する事は出来ない。しかし、周囲にいる人物に内容が聞こえるような読字行為は行っていないということが分かるであろう。しかし、どの作品でも読まれる対象は「書状」「書板」「盗んできた託宣」であり、書物ではない。いったいどれ程の長さであるかは記載が無いが、その場で読み終わられる程度の長さである事が分かる。つまり、こうした短い文章については、黙読が可能であり、かつ可能だとする共通の認識があったのではないか、と考えられるのである。

黙読は無自覚に行われる

しかし、筆者がそのような主張を行う前から、柳沼重剛やアルベルト・マンゲルは、『告白』の中にある黙読の場面に気付いていた。アウグスティヌスがまだ信仰に目覚めていない頃、友人のアリピウスと会っている状態で、ふと子供の歌う声が聞こえ、その声は「取って、読め」と聖書を読むよう示唆したのである。そして次のような記述が始まる。

それでわたしは、急いでアリピウスが坐っていた場所に引き帰した。わたしはそこを立ち去るとき、使徒の書をおいておいたのである。わたしはそれを取ってみて、最初に目に触れた章をだまって読んだ。(中略)

それからわたしは、指かあるいは葉のようなものをはさんで、書を閉じ、もう平静な顔にかえって、アリピウスに事の次第を語った。ところがかれの方も、かれ自身に何が起こったかを、それはわたしの関知せぬところであったが、わたしに語った。かれは、わたしが読んだ章句を見たいというのであった。わたしが見せると、かれはわたしが読んだ個所の次の句にも注目した。そこに何かあるかをわたしは知らなかったが、じつは「信仰の弱いものを受け入れよ」と書かれていた。かれはこの句を自身の身にあてはめてみてわたしに打ち明けた。⁽⁴⁰⁾

アリピウスの所へ戻り、聖書——つまり手紙などの短い文章では無い——を読むと、ついに信仰に目覚めた。そういった描写であるが、注目すべき場所は「だまって読んだ」こ

とであり、そしてその読んだ内容はアリピウスには聞こえていなかったという事である。こうした記述から柳沼氏やマングエルも、黙読に驚いたアウグスティヌス本人が黙読を行っていると評している。また、アリピウスの方もアウグスティヌスに見せられた聖書的一部分より先の記述を読んでいたが、その記述に対しアウグスティヌスはその時点では「そこに何かがあるかをわたしは知らなかった」と記述しており、アリピウスが少なくともアウグスティヌスに聞こえるような朗読を行っていない事を示している。

結論

まず、マクルーハンやオングといったメディア論者の唱える音読の文化は存在している。ただし、厳密に音読のみが可能であったわけではなく、音読に向かうような文化的バイアスが活版印刷の登場以前には存在したということである。ただし、歴史を包括的に捉え、大きな流れに還元していった場合の視点に限り有効な主張である。当然、個々の時代・地域には特有の文化が育まれており、大きな流れによって完全に説明しきる事は出来ない。

活版印刷の導入以前でも、イスラーム世界や日本では黙読・音読の区別を行い、効用について論じていたし、西洋に対象を絞ったとしても黙読はされていた。しかし、その存在は当たり前過ぎて記述される事は少なかったのである。アウグスティヌスやプトレマイオスのように直接的に言及する少ない例も存在するが、大抵は間接的に現れるものに過ぎなかった。間接的に言及されたテキストをつなぎ合わせると、以下のようなことが言えるだろう。

西洋文化史においては、音読を好む文化が存在していた。一方音読のみ可能であったと仮定するならば不可解な場面であるテキストが存在している。『イリアス』の現存本がどの時代に属するかは確定できないが、『イリアス』内にも音読のみ可能と考えると不可解な記述が存在している。また、古典期の『ヒッポリュトス』『騎士』を見れば読んだ内容が周囲の人間に伝わらない読書が存在し認知されていた事が分かる。

ヘレニズム期には音読の最中でも目視によって先の文字を読み取り、把握し音読を中止させる事が可能であると認識されていた⁽⁴¹⁾。ローマの資料ではあるが、アレキサンダー大王も手紙の黙読を行った。部下は大王の手紙を音読して読み始めたが、大王に止められて声を出して読むのを止めた。ローマ時代にはこの行為は違和感ないものであったと考えられる。

また、ローマ時代ではプトレマイオスが黙読の良さを説き、『レウキッペとクレイトボン』を見る限りだと読んだふりが（読みあげてないのに読んでいるように見せる行為が）ローマの読者には違和感のないものであった。議論の最中に手紙を読むのは驚くべき行為ではなかったし、アンブロシウスの黙読に驚いたアウグスティヌスも、自身が周囲に聞こえない読書——黙読——を行っていた。

またアンブロシウスの黙読の理由についても、喉の調子を挙げており、黙読とは身体の

調子一つで選択肢に入る当たり前の読み方だったのである。

確かに、古い時代の著作は記述の方法から見ると、読み辛く、黙読は——特に手紙や書板などの短いものを除いて——読字に熟練した人物にしか出来なかったのかもしれない、紙と活版印刷の導入が書物の判読性と量を増やし、読字の熟練者を増やした事も事実だろう。しかし、それでも黙読は活版印刷の有無にかかわらず、自覚無自覚問わず行われていた。本論にていくつもの検証と考察を行ってきたが、活版印刷の導入と黙読には必然的な因果関係があるとはいえないのである。

——注

- (1) ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳 藤原書店 1991. p.251; イヴァン・イリイチ『テキストのぶどう畑で』岡部佳世訳 法政大学出版局 1995. P.52; マーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系 活字人間の形成』森常治訳 みすず書房 1986. p.134
 - (2) 同上 p.133
 - (3) テキストの検証にあたっては、その引用の中でも注目すべき部分には筆者がアンダーラインを加えた。今回の論文中に引かれたアンダーラインはすべて筆者が新たにつけ加えたものである。検証するテキストは基本的に邦訳文献から引用するが、未邦訳のものは先行研究の部分訳を引用させて頂いた。とりわけ柳沼重剛『西洋古典こぼればなし』岩波書店 1995. およびアルベルト・マンゲル『読書の歴史 あるいは読者の歴史[新装版]』原田範行訳 柏書房 2013. からは多くの情報を得ている。
 - (4) 凸版印刷印刷博物誌編纂委員会編『印刷博物誌』凸版印刷 2001. p.135p
 - (5) アルベルト・マンゲル『読書の歴史 あるいは読者の歴史』原田範行訳 柏書房 新装版 2013. p.62
 - (6) 宮下志朗・井口篤編『ヨーロッパ文学の読み方—古典篇』放送大学教育振興会 2014. p.197
 - (7) イブン・ハルドゥーン『歴史序説』4 森本公誠訳 岩波文庫 2001. p.130
 - (8) 江村北海『授業編』新日本古典籍総合データベース (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100093225/viewer/29>) 最終閲覧日 (2021/10/29)
 - (9) 同上
 - (10) イスラーム世界での活版印刷の導入は 18 世紀頃、日本の活版印刷の導入は (使われなくなったキリシタン版や古活字版を除く) 19 世紀の活字職人本木昌造からと考えられる。
 - (11) 凸版印刷印刷博物誌編纂委員会編『印刷博物誌』凸版印刷 2001. pp.436-437
 - (12) 同上 p.854-855
 - (13) 前田勉『江戸の読書会 会読の思想史』平凡社 2018. p.39.; 岡島昭浩 twitter (<https://twitter.com/okjma/status/1202592112551723008>) 最終閲覧日 (2022/01/16)
 - (14) プラトン『パイドロス』藤沢令夫訳 岩波文庫 1967. pp.162-164
 - (15) 『アリストテレス詩学・ホラーティウス詩論』松本仁助 岡道男訳 岩波文庫 1997. p.107
 - (16) 『グーテンベルクの銀河系 活字人間の形成』では翻訳の際に若干言い回しが変わってしまったらしい。
- ギリシャ語に通じていない筆者にはどちらが翻訳の上で原文に近いかは判断できないが、岩波文庫の岡道男訳では「読むだけで」となっていた部分が、マクルーハンの引用を森常治氏が翻訳した場合「朗読」となっている。もっとも、岡道男訳の『詩学』であったとしても、上記の二十六章の悲劇が朗読する事を前提としていた事を考えると、このマクルーハンの引用も間違ったものではないだろう。
- (17) 『プリニウス書簡集』「第六巻 十三 朗読会 レスティトゥトゥス宛」國原吉之助訳 講談社学術文庫 1999. pp.236-237

- (18) マクルーハン、オング、マンゲル、柳沼氏等、この問題に注視する殆どの論者が触れている。
- (19) 聖アウグスティヌス『告白』服部英次郎訳 岩波文庫 1976. pp.167-168
- (20) アルベルト・マンゲル『読書の文化 あるいは読者の文化』原田範行訳 柏書房 1999. p.57
- (21) 聖アウグスティヌス『告白』服部英次郎訳 岩波文庫 1976. p.158
- (22) 桑木野幸司『記憶術全史 ムネモシュネの饗宴』講談社選書メチエ 2018. p.19-20
- (23) 同上 p.24
- (24) 上智大学中世思想研究所翻訳監修『中世思想原典集成 精選2 ラテン教父の系譜』平凡社 2019. p.122
- (25) 聖アウグスティヌス『告白』服部英次郎訳 岩波文庫 1976. p.70-71
- (26) 『弁論家について』(下) キケロー著 大西英文訳 岩波文庫 2005. p.252
- (27) 聖アウグスティヌス『告白』服部英次郎訳 岩波文庫 1976. pp.167-168
- (28) この作品は唄い継がれた口承文学であると伝わっている。一方で現存する作品は下記の記されたものであり、文字にするに当たって改変がされた可能性が高い。僭主ペイシストラスがホメロスの作品を記録させたという伝説が残っている。
- (29) ホメロス『イリアス』(上) 松平千秋訳 岩波文庫 1992. pp.190-191
- (30) エウリピデース『ヒッポリュトス』松平千秋訳 岩波文庫 1959. pp.60-63
- (31) おそらくボイオティアの予言者バキスの事を指すと思われる。
- (32) アリストパネス『ギリシア喜劇1』「騎士」高津春繁訳 ちくま文庫 1986. pp.126-127
- (33) 『ギリシア恋愛小曲集』「アコンティオスとキュディッペ」中務哲郎訳 岩波文庫 2004. pp.46-47
- (34) プルタルコス『モラリア4』「アレクサンドロスの運または徳について」伊藤照夫訳 京都大学学術出版会 2018. p.302
- (35) 後世の『愛の手紙』が、カリマコスの著述から離れていない場合に限る。
- (36) 柳沼重剛『西洋古典こぼればなし』岩波書店 1995. p.69
- (37) 『プルターク英雄伝』「マーカス・ブルータス」鶴見祐輔訳 潮出版社 2000. p.413
- (38) アキレウス・タティオス『レウキッペとクレイトポン』中谷彩一郎訳 京都大学学術出版会 2008. p.11
- (39) ホメロス作品の書き取り事業を命じたとされるペイシストラスはアルカイック期の人物。
- (40) 聖アウグスティヌス『告白』服部英次郎訳 岩波文庫 1976. pp.281-282
- (41) テキストに改変がなかった場合に限る。

—— 図像資料出典

- 図版1 『ヴァチカン教皇庁図書館展 書物の誕生 写本から印刷へ』印刷博物館 2002. p.17
- 図版2 ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史』田村毅共訳 大修館書店 2000. p.2
- 図版3 『ヴァチカン教皇庁図書館展 書物の誕生 写本から印刷へ』印刷博物館 2002. p.112
- 図版4 『ヴァチカン教皇庁図書館展Ⅱ 書物がひらくルネサンス』印刷博物館 2015. p.87.
- 図版5 同上 p.134